

8月15日

徳山の盆踊

会場 徳山浅間神社

古来から受け継がれる舞

昭和62年12月28日、国指定重要無形民俗文化財に指定された「徳山の盆踊」。

町内外に多くのファンを持つ徳山伝統の祭典です。この祭りの仕切りは、持ち回りで当番組が受け持つほか、区の交通部、文化部、寿会なども役割の一端を担っており、文字通り、地域をあげての祭りとなっています。

祭典当日の8月15日夕方、昼間降った雨の影響もなく、予定通り祭典が始まりました。道行きから帰った鹿ん舞一行が神社に姿を見せると、今か今かと待ち構えていた来場者たちが、舞台の周りで歓声を上げました。



石垣に腰かける人、立つまま見つめる人、肩車される子……。どの顔にも笑顔があふれていました。

「そーりやあ、うん、はい」のかけ声と共に、舞台の回りを勢いよく駆け回る鹿ん

舞。それに守られるかのよう、舞台上では巫女姿の女の子が優雅にヒーヤイを舞い、おごそかな雰囲気です。狂言が執り行われます。会場からは、割れんばかりの拍手と歓声が、いつまでも響いていました。

会場を訪れた来場者は「鹿ん舞いを見たのは小学生のとき以来。やつぱり迫力と元気があっていいですね」と話しました。

大人が子どもに教えるのは踊り方だけではありません。地域に伝えられてきた伝統、誇り、そして絆。そんな姿勢や気持ちも一緒に教えているのです。地域が一体となって受け継がれていく古典芸能。それが徳山の盆踊なのです。

地域の誇りを受け継ぐ祭典

徳山の盆踊に古色ゆかしい伝統を見る

国指定重要無形民俗文化財に指定される徳山の盆踊。いわば国の宝でもあるこの祭典は毎年8月15日に執り行われます。鹿ん舞、ヒーヤイ、狂言が、今年も来場者を魅了しました。

徳山の盆踊は鹿ん舞、ヒーヤイ、狂言の3部構成。その昔、畑の作物を荒らす鹿などを追い払い、豊作を祈ったのが起源とされる。現在では、舞台上で踊るヒーヤイなどを警護する役割へと変化してきている。



人と人がつむいだ絆が町の活気となってゆく

交流という新たな絆に期待
昨年発生した土砂災害によって、一部区間が不通となっていた井川線。その再開は、本町にとって何よりうれしいニュースとなりました。迫力あるSLと可愛らしいトロッコ列車は大井川鐵道の代名詞。イコール町の貴重な観光資源です。これから

東日本大震災によって、今再び「絆」の貴さが見直されつつあります。人と人がつながること、生まれる力。これからの本町を元氣付ける「活力」です。

キーワードは「お盆まつり」

寸又峡温泉美女づくりの湯事業協同組合が整備を進めていた親水公園「草履石公園」がこのほどオープンしました。温泉街の一番奥、夢の吊り橋に通じるプロムナードコースの入口付近に位置し、面積は3300平方mを誇ります。

「寸又峡を訪れた人にもっと自然を身近に感じてもらいたい」という地元住民の願いが結実したこの公園。山から水を引いた池に棧橋が整備され、家族連れなどが気軽に周遊できるようになっています。周辺にはカエデなどが植栽され、新緑や紅葉を楽しむこともできます。

右下の写真はお盆過ぎの同公園。何組かの観光客が夢の吊り橋への帰り道に立ち寄り、池の棧橋を歩きながら周囲の景色を楽しんでいました。寸又峡温泉の新たな観光スポットとして、関係者は期待を寄せています。

絆を生み出す場所「祭り」

お盆の時期に開催されたやっちやう祭とプチ盆踊りは、本町の夏の風物詩として今年も盛り上がりを見せました。その昔、豊作・豊漁を神に祈り、感謝の気持ちでささげた「祭り」。どれだけ時代が過ぎようとも、人々の絆と活気を生み出すことに変わりはありません。

祭典当日を最高のものにするために、何カ月も前から準備を重ねる人たちがいます。当日の舞台裏を支える人たちがいます。スタッフ、観客とが一体となって楽しむ、一緒に盛り上がる。地域が一つになっていく。人間関係が希薄になったと言われる現代にあって、この「絆」こそ祭りの一番の魅力なのかもしれません。

多くの人が訪れる本町にとって、何よりの朗報となりました。

